

演題番号：

乳用牛にみられた皮膚型牛白血病

○万所幸喜¹⁾、森一憲²⁾、種子田功¹⁾

¹⁾京都府中丹家保、²⁾現：京都府南丹広域振興局

1. **はじめに**：従来の牛白血病は、年齢と病変の分布に基づき、成牛型（地方病性牛白血病）、子牛型、胸腺型、皮膚型に分類され、牛白血病ウイルス（以下 BLV）によって起こる成牛型以外は散発性牛白血病とされてきた。今回、管内で飼養される乳用牛1頭において、BLV 抗体及び血中 BLV 遺伝子陽性で皮膚病変を認めた症例について、免疫組織化学的手法を用いて検査を行った。2. **発生状況**：発症はホルスタイン種、雌、38 ヶ月齢。肋部→全身→陰部→乳房の順で皮膚に乳頭腫様腫瘍が拡がり、乳量低下。発症から3ヶ月後起立困難となり死亡。3. **検査成績**：①血液検査：白血球数、リンパ球数の増加及びリンパ球異型率の上昇を認めた。②剖検所見：全身の皮膚に多くの乳頭腫様腫瘍を認めた。腫瘍は皮下織には達していなかった。主要リンパ節は大人拳大～大人頭大に肉腫様腫大。左右心耳及び左右心室壁に灰白色腫瘍を認めた。腹腔内では肝臓に軽度自己融解像、辺縁部にどんぐり大の灰白色腫瘍。脾臓は包膜緊張、剖面膨隆、髄質脆弱。腎臓は左腎の一部が腫脹し、右腎には腫瘍多発。子宮後靭帯にも一部腫瘍を認めた。③組織所見：肺、心臓、肝臓、脾臓、腎臓、乳房、全身の皮膚、リンパ節で腫瘍細胞の浸潤・増殖を認め、特に心臓、肝臓のグリソン鞘部、皮膚の真皮で重度であった。リンパ節では血液吸収像も認めた。腫瘍細胞は、中型で粗剛な核と少量の細胞質を有するもの並びに中型均一に染色される円形の核を有するものが混在していた。脾臓及び皮膚病変部の免疫組織化学的検査では、腫瘍細胞は CD79 α 陰性、CD3 および WC1 陽性であった。④病原検査：BLV 抗体陽性。血液 BLV 遺伝子検査陽性。病変部パラフィン材料の遺伝子検査では、リンパ節（肩前、乳房、浅頸）、陰部及び背部の皮膚病変の全てから BLV 遺伝子を検出した。4. **結論**：免疫組織化学的検査を含む病理学的検査から、本症例を牛白血病（皮膚型）（組織診断名：上皮向性 γ δ T細胞性リンパ腫）と診断した。本症例は免疫組織化学的検査で病態が明らかになったものであり、本手法により腫瘍の起源、性状、分布等を明らかにすることで、より明確な牛白血病診断の一助となるものと考えられる。